ハヤカワ文庫〈JA 54〉

復讐の道標

光瀬　龍

早川書房

著者略歴　昭和28年東京教育大学卒　作家「喪われた都市の記録」「たそがれに還る」「百億の昼と千億の夜」「カナン5100年」「多聞寺討伐」「寛永無明剣」他多数あり

JA=Japanese Author

復讐の道標

〈JA54〉

昭和五十年四月十日　印刷
昭和五十年四月十五日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　光瀬龍
発行者　早川清
印刷者　児玉幸男
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一〜八
振替番号　東京・四七七九九番

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社　製本・株式会社川島製本所

ハヤカワ文庫 JA
〈JA54〉

復讐の道標

光瀬　龍

復讐の道標

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

大学の正門前から駅へ向う繁華街のにぎわいに背を向けて、良介は見知らぬ裏通りへ曲った。それでもなお大学に合格したらしい一団が、入学者のしおりなどというパンフレットを開いて陽気な笑い声をまきちらしながら良介を追いぬいていった。

その笑い声に耳をふさぎたい思いで視線をそらせると、ショウウインドーのガラスにジャンパーのえりを立て、ひざのぬけたGパンに素足で運動靴をひっかけた見っともない自分の姿が写っていた。ふだんはあまり気にしたことのない自分の服装でさえ、今日は人に笑われているのではないかという気がした。いそぎ足に歩き出したかれを、こんどは三、四人の女子高校生が追いぬいていった。

「あなた、第二外国語、何とる？　フランス語？　それともスペイン語？」

「スペイン語。かれ、第二外国語スペイン語とったんだって。そのときの教科書やノートくれ

るっていうのよ」

「いいわねえ。あたしにもそのノート貸してよ」

「ダメ！」

「ほら、おぼえてる？　受験の時あたしたちの十番ぐらい前にいたすてきな人。ヤッチンが休けい時間に辞書借りたじゃない。あの人、受かってたわね。チャンスありそうじゃない。なんだかわくわくしてきたゾ」

キャッキャッと笑い声がはずんだ。良介はたまらなくなってさらにせまい路地へ入った。急にあたりが静かになり、良介の心におさえようのないさびしさがおそってきた。運ぶ足の一歩一歩が地面にのめりこむようだった。頭のしんにぽっかりと空白な部分があり、そこから苦い苦い後悔とすべては終ったのだというやりきれない無力感があふれ出して全身にひろがっていった。実際、すべては終ったのだ。良介にとって頭のしんに生じた空白は、そのまま良介自身の空白の明日を意味してもいた。良介の歩む路地の両側は材木置場やモルタル造りの古いアパートがつらなり、それらの一様に単調で陰気な風景が良介の心をいよいよ滅入らせ、絶望に落しこんだ。

良介はおととし高校を卒業した。一流の私立大学とほかに一校を受けて一年間の浪人生活に入った。予備校へ通い、つぎの年もう一度挑戦した。一年間の予定の浪人生活が二年目をむかえた。そして今年ぐっと目標を落して都心を離れた私鉄の沿線にある歴史の浅いある私立大学

をねらった。さらに同程度の大学をもう一校。しかし結果はどれもみじめな失敗に終り、良介は三浪をむかえることになった。

だが三浪の生活はもう良介には与えられない。去年失敗した時も、父や父の仕事をてつだっている兄は良介がそれ以上浪人生活をつづけることには大反対だった。商人（あきんど）には学問はいらないという。良介の家は金物屋だった。金物屋は釘からなべ、ヤカン、金属製の脚立まで、あつかう品物は実に多い。品物はかさばるし、まとまるとかなり重くなるのでどうしても人手がいる。父親は良介に使い走りの店員の役目をやらせたくてしかたないようだった。そうなれば人件費が大幅に浮くというのが父親の計算だった。

良介にはそれはわからなくもなかったが、父親が経営し、やがては兄が引きつぐ店を手つだっていたところで将来どうなるものでもないという気もちがあった。へたをしたら兄に給料をもらって一生使われることになりかねない。そうでなくてさえ良介の家はかなり家長独裁の傾向が強い。良介の大学進学の希望をかげで助けてくれたのは母親だった。しかしそれも良介が二浪の生活に入るとだいぶ稀薄になった。父や兄に気兼ねしたのだろう。

だから三浪ともなればこれはもう良介は孤立無援というほかはない。一時は家を出てもと思ったが、実際問題となると全く不可能だった。だから今度の受験は良介にとってまさに人生をかけたものだった。それに失敗したのだ。

良介の足は重く、心はその重さに萎（な）えていた。

——あなた、第二外国語、何とる？　フランス語？　それともスペイン語？
——ヤッチンが休けい時間に辞書借りたじゃない。あの人、受かってたわね。
「ちくしょう！」
良介はうめいた。あんなやつらが受かっているというのに！
ああ、おれはだめだ！　おれは低能であほうでおっちょこちょいなんだ。もっと勉強するんだったなあ。受験雑誌にはあそこは四割五分できれば入れるだろうなんて書いてあったが、あのやさしい問題でさえ四割五分とれないんだからな。おれは問題を読みちがえたのかな？　なんだか高校を卒業したての頃より学力が落ちてきているような気がする。こんどこそきっと！
でも、もうだめだ。
良介の頭はとりとめもなく空転していた。何を考えてもさいごには受験もこれで終りなのだという強固な壁に突き当った。それから先は少しも考えが進まなかった。

●

2

裏道から裏道をたどって歩いているうちに、良介はふたたびにぎやかな商店街へ出た。あまり遠くない所で踏切の警報器が鳴り、駅のアナウンスが聞えてきた。どうやらひと駅歩いてし

まったらしい。電車に乗って家へ帰るにはまだ気もちが落着いていなかった。良介は一軒の小さなスナックに入った。町の青年たちのたまり場になっているらしく、入っていった良介にかれらの視線がよそ者を見るように集中した。

良介はすみのテーブルに身をちぢめ、コーヒーとハンバーグを注文した。壁には大きく引きのばしたグランプリレースの写真が飾ってあり、車体をこすり合うようにして疾走するマクラーレンの前頭部に客のいたずらか、マジックインキでハーケンクロイツが描かれていた。

よく見ると壁のあちこちに相合傘のしるしやきわどい落書がある。床に散らばっている古い競馬新聞といい、たばこの焼け焦げだらけのテーブルや椅子といい、客だねはあまりよくないらしい。運ばれてきたコーヒーやハンバーグもまずかった。途中でやめてたばこに火をつけた。はじめて静かな悲しみが水のように良介の心をぬらした。たばこのけむりはあるかないかの気流にのって壁を這い上り、マクラーレンにあわい影を落した。

そのとき、ふと良介は女の悲鳴を聞いたような気がした。しかしカウンターにならんでいる若者たちの笑い声がそれ以上の注意をさまたげた。耳のせいだろう。食器の触れ合う音や、のどからもれる笑い声が、時にそのように聞えることもある。良介は短くなったたばこを灰皿におしつぶした。また聞えた。こんどははっきり切り裂くように良介の耳を打った。

どこだろう？　良介は思わず腰を上げた。しかしカウンターの若者たちや、調理場の白い上っぱりを着た男も少しも気がつかないようだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

どうしよう？　たしかにあれは悲鳴だったが。良介はかれらに知らせてやろうかと思った。この近所で女が助けを求めているのだとすれば、この土地の者であるかれらの方がずっと行動しやすいはずだった。テーブルを離れた良介にかれらの二、三人が顔を動かした。

——助けて！　助けてください！

そのとき、声をふりしぼった若い女の絶叫が良介の胸をつらぬいた。どこかすぐ近くだった。ことによったらこの建物の中かもしれない。良介はカウンターに走り寄った。

「女が助けてくれと言っている！」

良介はコックらしい男とカウンターの若者たちに半々に言った。

「女が？」

「助けてくれって？」

カウンターにならんだ若者たちはけげんそうに顔を見合わせた。

「どこでよ？」

「もしかしたらこの建物の中だ」

「おまえ。聞えたか？　そんな声」

「いや」

調理場の男の顔がけわしくなった。

「お客さん。女の悲鳴だかなんだかしらねえが、妙な言いがかりはやめてくれよ。この建物の

中かもしれねえとはいやなことを言うじゃねえか！」
男はカウンターのわきの低いスイングドアを押して出てきた。
「でも、たしかに聞えたんだ」
「女の悲鳴がか？　おれには聞えなかったぜ。あんたたちは聞えたかい？」
男は若者たちをふりかえった。
「聞えなかったな」
「それみろ。おい！　てめえ、この家の中に女でもかどわかしてかくしてあるとでも言いてえのかよ！」
「助けて、と言うのが聞えたんだ」
「いい耳持ってやがるな！　誰にも聞えねえものがてめえだけに聞えたってのかい。このやろう！」
男はいきなりうでをのばして良介のジャンパーのえりをつかんだ。
「なにをするんだよ！」
ふり切ろうとしたとたんに男の手が飛んできた。痛烈な打撃とともに眼球の内部に無数の火花が散った。姿勢を立て直す余裕もなくまた一撃をくらった。どんと突き放されて背後の壁にしたたかに体を打ちつけた。
「さあ。食ったもののかねを払ったらさっさと出てゆけ！　このきちげえやろう！」

向うずねをいやというほど蹴飛ばされた。良介は何を考える気力もなく、ポケットから五百円札を引き出した。男はそれを良介の手からひったくると、調理服のポケットに突込んでそのまま調理場へもどっていった。

「おつり百円くれよ」

良介はくちびるの端から流れ出る血を手の甲でぬぐった。男はふり向きもしなかった。

「おつりをもらっていないぜ」

良介はカウンターに近づいた。男が若者たちにあごをしゃくった。

「百円つりをくれって言っているぜ。誰か払ってやってくれよ」

良介は一瞬あっけにとられた。客につりを払わせる店がどこにあるだろうか。だがそれは良介の人の好い思いちがいだった。

「よし。百円だな。おれが払ってやろう」

肩やそでに房のついた皮ジャンパーの青年が立ち上った。ジャンパーの下の胸もとで金属片をつらねた長いネックレスが濁った交響を発した。やせた顔に兇悪な翳が浮かんだ。若者らしくない落ちくぼんだ目がへびのように光った。

良介はとっさに身をひるがえすと出口へ向って走った。青年が何かさけび、良介がドアを開くと同時にドアの柱に細長いナイフが突き立った。歩道に走り出る時、店の中でどっと笑い声がわいた。

3

「良介。今日斎藤病院へおさめるヤカン二十個、よくみがいておけ」
「カスガイの三号と四号を三ダース店に出しておけ。それから花蝶から注文のあったたくわがたじるしのジャー、八個。昼までにとどけておけよ。保証書忘れんな！」
良介は朝から休むひまもなかった。ついに入試に失敗したことについては父も兄も何も言わなかった。何も言わなかったかわりに、翌朝からもうそれが既定の事実であるとしてたたき起され、小島藤作商店とネームの入った作業衣を着せられ、裏の倉庫へ追い立てられた。
このへんでは今、さかんにたくさんの分譲住宅が建設されている。そのせいか朝早くから建築用の金物を買いにくる大工やとびなどがいる。現場に用意した品物の中に不足が出るらしい。だから午前七時頃にはもうおもてのシャッターの一部はあけておく。その早い客の相手をするのが店でいちばん若い使用人の役目だということだった。つまり良介がそれだった。
昼までの間に良介の体は古綿のように疲れ果ててしまった。裏の倉庫と店の間を往復するだけで腰が痛くなり、ひざから下がまるで石のように重くなった。
昨日までの生活がまるでうそのようであり、その昨日までの生活と今の自分との間には、も

はや取りかえしのつかないはるかな距離があった。良介といっしょに高校を卒業してただちに就職した連中は、すでに背広も身についた一人前のビジネスマンになっていた。かれらの未来は安定していた。かれらと良介の間に生じた二年の差は、単に時間的なものだけではなかった。

良介と同じように二浪の生活をへてなお来年を目指す友人も二、三人いた。しかしかれらの場合はねらいはあくまでも東大や一橋であり、家庭の事情も良介の家とはだいぶ異っていた。これまでも同じ浪人どうしでありながらかれらの方で良介を相手にしないようなところがあった。あくまでも目的の学校をねらいつづける者と、大学の三年生になろうとする者と、そしてすでに社会にあってサラリーマン三年目をむかえようとする者と。

そのどれでもないところに良介はいた。結局、良介の得たものは小島藤作商店のネーム入りの作業衣だけだった。

昼めし時になって父と兄は座敷へ上り、良介は店番を兼ねて店の奥に積み上げた電動工具のセットのボール箱の上にめしを運んでもらって食った。

「使用人だったらカツなんかつかないんだよ」

母親がめしを盛ったどんぶりをわたしながら言った。

「良介も少し修業しなければだめだ。カスガイのダース箱をかかえてひょろひょろしていやがる」

兄の声が聞えた。はしを持つとひじから先が奇妙にふるえた。カスガイのダース箱の重さの

感覚がそのままうでに残っていた。
昨日の今頃はあの町をあてもなくさまよっていた頃だった。嬉しそうな合格者たちの群れ。それを避けてたどった日陰の路地。そしてあのスナック。
「そうだ。あそこで悲鳴を聞いたのだった。助けを求めている女の悲鳴を！」
良介は思わず立ち上った。あれはそら耳だったのだろうか？　あの店の男やカウンターの若者たちは、そんな悲鳴は聞えないと言った。もしかれらがうそを言ったのだとしたら？　あの店のどこかに女の子が閉じこめられていて、必死に助けを求めていたのだとしたら？
「おれのそら耳じゃない。たしかにおれは聞いたんだ」
悲鳴がほんものであったからこそ、あの男は暴力にうったえてでも聞えた悲鳴を否定し、おれをあの店から追い出そうとしたのだ。それにちがいない。
良介は手のはしを投げ出して自分の胸の疑いに思いをこらした。何かある。ぜったいに何かある！　それは確信だった。
よし。行ってみよう！　あの店へ。
良介が体を動かしかけたとき、
「良介！　めしを食ったらいそいで中野工務店まで行ってきてくれ！」
父親の声が店と座敷の境ののれんを割って飛んできた。その声に良介は現実に引きもどされた。今は自分勝手な外出もままならぬ小島商店の使い走りだった。良介の首は力なく垂れた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com